

プリンスリーグ東海 (TSG) の印象

2014.12.10

J F A プリンスリーグ T S G 東海担当

池谷 孝 (清水エスパルス)

■始めに

11 試合の総括的印象です。

■全体的印象

- ・平均的な(下手でない)ボール技術を持つ選手の集まったチーム。
- ・よく走る選手、運動量はある。
- ・中盤、バイタルの比較的狭いエリアでグループ、個人がボールを保持できない。
- ・個の奪う意志、奪う迫力が弱い。チーム戦術の中に個の奪う力の育成が埋没している。
- ・ゲームを決定づける個の存在が薄い。ボールを奪う個、シュートを決める個の二人。
- ・ゲームを読んでプレーしようとする意図に弱い。ゲームのイニシアチブが選手に薄い印象。
- ・チーム構築のところでもっとよいゲームができるポテンシャルを選手は持っているように感じる。
- ・指導者に、システムの解釈と有効な選手配置に熟慮が必要ではないか。
- ・ベンチの言葉に具現性 (connotation 含蓄) があるか疑問に感じる時がある。

■トランジション

- ・ボールを奪われた後のファーストディフェンダーが明確でなく、さらに全体でプレスをかけるのかディレイしてブロックを作るのかの意図 (境目) が曖昧。
- ・ボールを奪った後の最初のプレーに、ゴールに向かおうとする意図が薄い。

■守備

- ・それぞれが頑張っているが、ボールを意図的効果的に奪う戦術が弱い。
- ・密集した状態では奪えるが、そこから広く展開されると簡単に突破を許してしまう。
- ・一人で奪う力が薄く、それが形だけのブロック守備、相手ミスに救われる消極的守備につながっている。
- ・動き惜しみせず守備に参加しようとする。しかし、もっと効果的な守備が個人、2人、みんなでできる。

(愚直性、敏捷性、粘り強さ、持久性、組織力という日本人の特性を生かすべき)

■攻撃

ポゼッションをベースにしたリスクチャレンジ

数チームを除きパスを効果的につなぐ技術が弱い。これはオフのプレーヤーの認知力 (ルックアラウンド、ポジショニング、パスコースの作り方) とオンの選手の認知力 (受ける前に観る、ボールの置き方) ことが十分習得されていないことが見られる。チャレンジの部分でもポゼッションが不完全なので崩すためのタイミングが確保されない。ミスで終わるシーンが多く、これが幅を使った攻撃を難しくして立て板に水的カウンターの繰り返しになる試合をいくつか見た。走ることにに関しては意欲的に走るが、走ることが攻守のプレーの質に必ずしも結びついていない印象を受ける。効果的な動きでないという意味。

■その他

- ・守備ラインの攻撃力は弱い。S Bの攻撃力が薄いので中盤を作れない。
- ・足元でパスを廻すので、全く相手の守備に変化を起こせない。
- ・ボールをつなごうとするが、スペースの作り方見つけ方使い方に意図がない。狭いエリアの連動性に欠け効果的にゴールに迫るポゼッションが弱い（磐田は意図的なトレーニングを感じる）。
- ・選手自身に、判断・決断したプレーが弱く、ただ前に蹴ってしまうプレーが散見される。スピードとフィジカルが出過ぎて、(勢い任せの)細かな技術的ディテールがスポイルされている印象。
- ・バイタルエリアの明確な崩しのパターンなし。
- ・ゴールに向かうためにパスをつなぐこととパスに逃げることは全く異なる。
- ・1対1の状況を作るためにパスをつなぎ、この相手をおかわせばシュートまで行けるという状況を明確に意識していない。

■技術

- ・人とボールが動きながらプレーする（スペースで動きながらプレーする）というニュアンスでの、出し所受け所と、次のプレーのための最良のファーストタッチの技術と意図がさらにもう1ランク明確であれば、もう少しゲームの流れを作ることができるように感じる。
- ・フィジカルの強さに対抗する技術が必要

■チーム

密集しながらボールを運んでいく意図、奪われたら即座に奪い返す意図を持つチーム、中盤より前の攻撃力はあるが守備ラインは守り組のチーム、ボールはつなぐがフィニッシュのイメージに欠けるチーム、フィジカルの頑張りはあるが戦術に脈絡がないチーム、全体的な技術力と形に欠けるチーム。

■トピックス

- ・優勝したのは清水桜ヶ丘、2位は静岡学園、3位はジュビロ磐田。2位3位チームはポゼッションと守備の切りかえを意図的に行っていたが、優勝した清水桜ヶ丘はシンプルに前線にロングボールを蹴りこむチームスタイル。ボールポゼッションを志向し、対戦相手のそれに慣れている多くのチームが、前線がよく走りシンプルに蹴りこんでくるサッカーに対応できず金属疲労を起こすように失点してしまう結果が一因ではないかと思う。
- ・リーグ戦であるが、ベンチがトーナメントのようなメンタリティで指導している感じがした。勝負に対するこだわりというニュアンスではなく。いくつかのチームの選手は監督のために勝利をささげなければならないという雰囲気です試合をしていたと言ったら言い過ぎであろうか。

■提言（控えめに）

- ・多く走ることと、プレーの質サッカーの質を一致させる。
- ・ボール技術、観る技術、走る技術、奪う技術を習得させ、並行して選手個々の主体性を習得させていくことが、選手自身がゲームを読みゲームを作っていくことにつながるのではないか。
- ・チームのスタイルを持つことのストロングポイントとスタイルを持ちすぎることがスポイルすることについて熟考。